



Total knee arthroplasty in Japanese patients aged 80 years or older

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2019-12-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小平, 俊介 メールアドレス: 所属:
URL	https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000286

論 文 内 容 要 旨

しめい 氏名	こだいら しゅんすけ 小平 俊介
学位論文題名	Total knee arthroplasty in Japanese patients aged 80 or older
<p>【背景】現在、人工膝関節置換術(Total knee arthroplasty, TKA)は広く行われている治療法である。今後、日本では人口の高齢化に伴い、手術対象症例のさらなる高齢化が見込まれる。本検討では、80歳以上の高齢者に対するTKAの有効性と安全性を調査した。</p> <p>【方法】平成21年1月から平成26年6月までの期間に、坂下厚生総合病院にて変形性膝関節症に対する初回TKAを施行した症例のうち、手術時年齢が75歳以上80歳未満の中間年齢層を除外した1352例2047関節を対象とした。対象症例を、手術時年齢が80歳以上の679例1003関節を高年齢群、75歳未満の673例1044関節を若年群として2群に分類し、JOAスコア、関節可動域(Range of motion, ROM)、術後在院日数、術後合併症、インプラントのゆるみ、感染の5項目について比較検討を行った。</p> <p>【結果】JOAスコアの改善率〔(術後JOAスコア)÷(術前JOAスコア)〕は、高年齢群1.78±0.02、対照群1.77±0.01であり、有意差を認めなかった。ROMは、高年齢群が〔術前〕伸展-8.2±0.1/屈曲130.9±0.5、〔術後〕伸展-0.9±0.1/屈曲133.4±0.5、若年群が〔術前〕伸展-5.6±0.2/屈曲130.7±0.6、〔術後〕伸展-0.3±0.1/屈曲133.3±0.5であった。両群とも術後有意に改善しており、両群間では、伸展で有意差を認めるものの、屈曲では有意差を認めなかった。術後在院日数は、高年齢群が18.8±0.3日、対照群が16.8±0.2日であり高年齢群の入院期間が2日間長い結果となった。術後合併症の発症率は、せん妄、創部治癒不全、急性心不全が高年齢群に多く、肺炎、脳梗塞、腓骨神経麻痺、褥瘡は有意差を認めなかった。インプラントのゆるみは、高年齢群に0関節、対照群に5関節と有意に対照群に多く発症し、感染は、高年齢群5関節、対照群2関節と有意差を認めなかった。</p> <p>【結語】JOAスコアの改善率からは80歳以上の高齢者であっても、TKAの有効性は75歳以下と同等であることが確認された。80歳以上の高齢者であっても、術前より特定の合併症に留意することにより、より手術の安全性が高まると考えられる。</p>	

※日本語で記載すること。1200字以内にまとめること。

学位論文審査結果報告書

令和元年7月3日

大学院医学研究科長 様

下記の通り学位論文の審査を終了したので報告いたします。

【審査結果要旨】

氏名 小平俊介

学位論文題名 Total knee arthroplasty in Japanese patients aged 80 years older

(80歳以上の日本人患者に対する人工膝関節置換術)

提出論文及び学位論文審査会での発表を基に、審査した結果についてご報告いたします。

小平氏は、本研究においてデータ収集・解析、論文作成ならびに一部の手術を担当し、本研究における主たる役割を果たしていたことを確認しています。

本研究は、日本人高齢者に罹患頻度の高い変形性室関節症に対する単施設での人工膝関節置換術(TKA)治療データを基に、高齢群(80歳以上)と対象群(74歳未満)それぞれ600例1000関節を超える極めて大きな集団で比較検討を行った後ろ向き研究です。術前後のJOAスコアの改善率・関節可動域の変化およびインプラントのゆるみからTKAの有効性が対象群と同等であること、術後合併症の検討から高齢者ではせん妄、急性心不全の発生に留意する必要があることを結論付けている。

先行する論文では、高齢者に対する TKA の有効性は JOA スコア等の絶対値で評価し、若年者に比して劣るとする内容がほとんどであるが、その結果は実臨床で専門医が感じている結果とは異なる内容であった。本研究では症状改善率を比較し、高齢者に対する TKA の妥当性を示した初めての論文であり、研究の結果は、すでに“Clinical Interventions in Aging”(IF: 2.585)に publish されている。

以上より、本論文は学位論文に値するものであると判断いたしました。

なお、審査委員より小平氏に若干の修正点を依頼しています。統計解析方法や本論文の専門領域内での位置づけに関して Discussion に追記する内容であり、本論文の結論を変更するほどの修正ではありません。審査委員で修正点を確認し、最終版を期日までに提出していただく予定です。

論文審査委員 主査 見城 明

副査 関口美穂

副査 岩佐 一